

人間の形成過程に関する一考察

——本との「であい」的契機を中心に——

小 高 晋 二

1 はじめに

この小論の目的は、一言で言えば、「であい」が、殊に、本との「であい」が、その人の人間形成にどんな役割を果たしていたのか、どんな意味を持っていたのか、というようなことを、主として、作家尾崎一雄を例として、明らかにすることにある。有体に言えば、私の場合、本来の興味の重点は、どうしてその人間はそういう人間になったのか、ということにある。例えば、金子ふみ子なら『何が私をこうさせたか』ということであり、藤森成吉の戯曲なら『何が彼女をそうさせたか』というところであろう。つまり、どうしてその人間はそういう思想、考えを持つようになり、そういう行為、行動をとるようになり、そして、そういう態度、姿勢を示すようになったのかということに私の関心はあるのである。この、ある人間がある思想、ある考えを持ち、ある行為、ある行動をとり、ある態度、ある姿勢を示すようになることを、仮に、人間の形成という言葉で表すとすると、この人間の形成という問題それ自体が、そう簡単に答えを出すことのできるような問題ではないと思われる。と言うより、むしろ、教育の永遠の課題と言ってもいいような、大きな課題であるだろう。それ故、ここでは、人間の形成それ自体を取り上げるのではなく、そういう考え、行動、態度を持つに至らしめた、言い換えれば、そういう人間の形成に関わったと思われる諸々の契機の中で、主として、本との「であい」という契機を取り出し、その本との「であい」が、人間形成に果たす役割を明らかにすることに焦点を絞って考察を加えたいということなのである。つまり、その人は、どの本のどの部分に共鳴してどうなったのか、即ち、どう考えるようになり、どう行動するようになったのか、というようなことを明らかにしたいということなのである。そして、本論の場合、それをさぐる手掛かりとして、自伝等、自分の人間形成について語っていると思われる文章、いわば、本人の告白、自己を語るものを材料に、それを見ていきたいということなのである。尚、ここで自伝等と言う場合、それに含まれるものは、自伝、自叙伝、回想録あるいは手記と題されるものはもちろんのこと、自己の経歴、履歴、思い出等を語ったものの全てを意味している。

ところで、自己を語るものを材料にすることについては、なにがしかの問題があるかもしれない。否、なにがしかどころか、大いに問題があるかもしれない。と言うのは、自己を語るものを

材料にする以上は、書かれていることに信頼を置くというのが一応の前提になるのであろうが、果して、書かれていること、語られていることをそのまま信用してよいかどうかについては、疑問が残るからである。つまり、書かれている、語られている内容の信憑性については、検討の余地が少なからずあるのでは、ということである。

例えば、自伝については、「一切の自伝は、虚と実の微妙な混淆」で、「かりに当事者、また第三者の証言をことごとく寄せ集めて、照合してきた所で、所詮は、さまざまな詩と真実の多面鏡というにすぎぬ」し、「自伝の書き手というものは、程度の差はあれ、必ず何ほどかの演技者に違いない」という、佐伯彰一の指摘もある⁽¹⁾。また、小島直記には、「自伝信ずべからず、他伝信ずべからず」という言葉もある⁽²⁾。

自伝等を書いている本人の言を読んでみても、「本当の事をあらいざらいぶちまけたら」、書いている本人以上に、「困る人間も多少は居そうに思えるから」、そういう人が一人もいなくなるまで、一切を「心一つに秘蔵して置く」、という、予め構えて書く、いわば、真実秘匿派とでも言えそうな人もいる⁽³⁾。里見弴のように、幼時など記憶がおぼろげであるが、「悪意さえ含まなければ、少々の相違がこれあったところで、まァまァと大目に見逃して頂けよう」と、前以って予防線を張る人もいる⁽⁴⁾。また、自伝等には、自分に都合の悪そうなことは、すっぱりと抜け落とさせてしまう、或いは、隠してしまうという、いわば、事実隠蔽派とでも言えそうな人もいるようである⁽⁵⁾。逆に、無いことでも、恰もあった如くに書いてしまうという創作派の人もいるかもしれない⁽⁶⁾。佐伯彰一は、「ぼくらの記憶と想像力とは、どうやらシャム双生児といたいほど、ぴったりと背中合わせにはりついている。私語りにおいては、この間の事情をまざまざと浮かび上がらせるような事例が多く、どこまでが事実的な記憶で、どこからが想像力による作りかえ、いや創造であるかは、きめ難い」と言っている⁽⁷⁾。

確かに人は、自分に関する文をものするに際し、自分に不都合なこと、不利なことは、出来るだけそれを避けたいという心理が殆ど無意識の内に働くかもしれないし、また、その反対の場合もあるかもしれない。殊に、社会的事蹟、評価、名誉等に関する場合はそうかもしれない。従って、自伝等書かれていることの、何をどこまで信頼していいのかは疑問の残るところかと思われる。しかし、ここに取り上げるような人間の自己形成それ自体に関する叙述は、本人や本人と直接関係のある人々の社会的事蹟、評価、名誉等と必ずしも密接に結びつくものとは思えないので、読者に読ませるためのそれなりの粉飾はあるにせよ、取り立てるほどの虚飾はないのではないかと思うのである。それ故、ここでは、その限りにおいて、書かれてあること、語られていることを原則的には信用する立場で自伝等を扱うこととしたい。

以下、本題に入る前に検討しておきたい問題があるので、まずそれらを探り上げておきたい。すなわち、それは、ここで言う「であい」とはどういう意味かということと、先程ちょっと触れた、人間形成とはどういうことか、ということについてである。

2 「であい」について

この小論では本との「であい」をテーマとしているので、はじめに、「であい」「であう」という言葉について簡単に触れておきたい。

この「であい」「であう」という言葉は、話し言葉としてはともかく（つまり、さほど多くはないとしても）、書き言葉としては、昨今特に、日常一般的に用いられる言葉であるように思われるが、その意味は、本来的には、どういう意味なのであろうか。まずそれをみておきたい。

この「であい」「であう」という単語の辞書的意味については、小林司が『出会いについて』という著書の中で、日、英、独、仏の辞書の引用を含め、かなり詳しく述べているので、ここではその繰り返しになるようなことは避けたい。従って、とりあえずここでは、そこに採り上げられている「であい」の代表的意味だけを紹介するにとどめておきたい。すなわち、日本語の「であい」の意味は、「であうこと」「めぐりあうこと」、「出て会うこと」であり、日本語の「であい」に相当する英語、encounter の意味は、「……との遭遇。出会い」、「顔つき合わせて会うこと」であり、独語、Begegnung の意味は、「出会い」、「出会うこと」であり、仏語、rencontre の意味は、「場合。偶然」であるという。そしてこれらの辞書による「であい」の意味には、結局、「『偶然にばったりでくわす』というような意味しか書かれておらず、『すべての真の生は出会いである』（ブーバー）とか、『ピカソの絵との出会いが彼を変えた』という場合の『出会い』という単語の用例についてはどれにもまったく記されていないことがわかった」ということである⁽⁹⁾。つまり、「であい」の辞書的意味は、用例も含め、単に二つのものの、いわば、非価値的、非精神的「であい」（「対面」とか「合う」こと）ただそれだけを意味し、それのもたらすその後の結果、効果のようなもの、即ち、それが人生とどう関わったかというようなことは問われず、従ってそこに精神的意味、価値は一切含まない、というのがこれまでの「であい」の意味であるということのようである。しかし、辞書的意味はともあれ、昨今一般に「であい」が述べられている時には、確かに、『出会いについて』で指摘されているように、ただ「単に物体としての人や物に会うことだけを意味しているのではなくて、出会いの結果おこった自己への心理的影響をも言外の意味に含め」て用いられることも多いと思われる⁽¹⁰⁾。つまり、先に挙げた「すべての真の生は出会いである」という場合の「出会い」や、「ピカソの絵との出会いが彼を変えた」というような場合のそれである。だとすれば、これからは、その点についても注意を喚起しておく必要があるのかと思われる。

ところで、この「であい」「であう」が、一般にどう表記されているかもちょっと見てみたい。辞書の表記は、私の見た限りでは、「出会い」「出合い」「出会う」「出合う」に限定されている⁽¹²⁾。しかも、「会」と「合」とは全く同じ扱いのようである。しかし、実際には、面白いことに、必ずしも「出会い」「出合い」「出会う」「出合う」と書かれるとは限らない。確かに、本の題名や

論文の題名の場合をみると、『出会いについて』とか『出会いの……』『……との出会い』となっていて「出会い」が圧倒的に多くを占め、「出逢い」等は少数派のようである。しかし、一般の文章の中で用いられる場合は「出会い」に限らず他の表記も結構多く用いられている。まず、幾つか例を挙げたい。

- 「私は歌舞伎座の廊下で永井さんにばったり出会った」(広津和郎)⁽¹³⁾
- 「旅に出るようになって、私自身の内部では、さまざまな出あいによる思いがけない変化が始まっていたことはたしかです」(沼田曜一)⁽¹⁴⁾
- 「そのころ私は、強い印象を受けた三冊の本に出合った」(吉田ルイ子)⁽¹⁵⁾
- 「東宝本社の玄関に入ろうとしたら、昔、有楽座の楽屋でエレベーターを運転していたオヤジにバッタリ出逢った」(森繁久弥)⁽¹⁶⁾
- 「好きな本に出遇うと、何度でも読むわたちなのは、ものぐさの一種だと言った人があるが、……」(篠田桃紅)⁽¹⁷⁾
- 「……わたしは、高群逸技の著書と、その生き方に出遭った」(石牟礼道子)⁽¹⁸⁾

このように、「であい」「であう」は「出会った」「出あい」「出合った」「出逢った」「出遇う」「出遭った」とさまざまに表記されている。また、「であい」「であう」といっても、その対象によっていろいろな場合があるので、対象の差による表記の差があるかどうかを見てみると、人が人に「であい」「であう」場合は、「出会い」が当てられることが多いようである。⁽¹⁹⁾しかし、人が人以外のもの、ことに「であい」「であう」場合には、「本に出会う」「本との出逢(あ)い」「本に出遇う」とか、「この言葉に頻繁に出会います」「言葉に出合った」などのように、「であい」「であう」対象が同じ場合でも、表記は様々のようである。⁽²⁰⁾

以上、「であい」「であう」についてのいろいろな表記を見てきた。人によっては、対象に応じて、人には「出会い」、物事には「出合い」と区別して用いている場合も見られるが、しかし、一般には、対象による表記の差は必ずしも意識はされず、いろいろに表記されているようである。何故表記がいろいろなのであろうか。思うにこれは、「であい」「であう」という言葉には、書く人の思い入れが殊の外強くこめられる場合があり、その結果、いろいろな字が用いられる、ということなのではないだろうか。⁽²¹⁾

因みに、手元の角川『漢和中辞典』でそれぞれの漢字の主な字義をみると、「会」は、「あう」「あつまる」で、「集まること」、「合」は「あう」で、「両方がぐあいよく一つにあうこと」、「逢」は「あう」「むかえる」で、「向こうから来る人にあうこと、またであうこと」、「遭」は「あう」で、「ばったりとあうこと」、「遇」は「あう」「もてなす」「たまたま」で、「ふと行きあうこと」となっている。「出」は「物が内から外へでる」である。従って、漢字の字義からすると、「会」「合」と「逢」「遭」「遇」とでは若干ニュアンスに違いがあるように思われる。つまり、「会」「合」の方は、「であい」の結果二つのものが一つに纏まる、一つに形成されるという感じがするのに

対し、「逢」「遭」「遇」の方は、「であい」の後も二つのものが別個に独立してそこにあるという感じがするのである。しかし、「であい」に当てられる字がなんであれ、それが用いられる時には、大別して、二つの場合があると考えられる。即ち、先に触れたように、ただ単に「ばったり出会った」という場合のように、「出て（偶然）ゆきあう」ということ、ただそれだけのことを意味する場合と、もう一つ、「彼と出会ったことが私の人生を変えた」という場合のように、「心と心の触れ合い」を含む、その後の精神的な影響までも意味する場合、つまり、「であい」がその人の人間形成に深く関与していると考えられる場合とである。この小論で問題にしたいのは、勿論、後者の場合の「であい」についてである。いずれにしても、「であい」「であう」に漢字を当てるとすれば、出会い、出会いと出逢い、出遭い、出遇いとは区別があった方がより適切のように思われるが、ともあれ、この小論では、「であい」の表記としては、辞書の表記に従い、以後は出会いを用いたいと思う。

ところで、出会いという概念については、周知のように、ボルノウがその著『実存哲学と教育学』において詳しく述べているので、それにも少しだけ触れておきたい。

ボルノウは、出会いについて、次のように述べている。即ち、

「人間は出会いにおいて、いまだ見たこともなく、まえもって予見することもできず、それどころか宿命的に、かれに向かって立ち現れるもの、かれが従来の観念で予期していたのとはまったく異なったもの、したがって、あらたに立場をさだめることをかれにせまるものにでくわすというのが、出会いのかわらざる意味である。それゆえ、出会いは、この意味において、きわだって引き立たせられた出来事であり、「度のつよい非連続的な出来事であり、人をこれまでの発展の道筋から投げ出し、あらたにはじめからやり直すように強いるものである⁽²²⁾」と。また、出会いは、「二つの実在が、おなじ実在性の重みをもって、たがいにぶつかりあう」のであり、「人は、でくわしても、かれを避けない実在との出会いによって、もっとも本来的な意味において、〈動揺〉させられる」ものだともいう⁽²³⁾。さらに、ボルノウは言う。「厳密な意味で出会いと名づけられるものは、ただ、比較的まれな、しかしまた決定的に重要な事象のみである。そこでは、他の人間がその人の核心に触れ、そのため、かれのこれまでの生全体が、一切のくわだてや期待とともに投げすてられ、かれにとってまったくあたらしいなものかがはじまる。このようなことが運命的に人をおそうときにのみ、本来的な意味で出会いについて語られるのである⁽²⁴⁾」と。そして、出会いという語は、二人の人間の間具体的な関係に限定されて用いられていたのが、用法の拡大によって、その対象がほとんどあらゆるものに適用されるまでになってきている。しかし、出会いの概念を教育理論に取り入れるのであれば、「人格的な出会いにおいて出会い概念を実存カテゴリーとして特色づけたいくつかの特徴を、転義においても、やはり保持しなければならない⁽²⁵⁾」としている。

また、谷口龍男の『出会いの哲学』によれば、「出会い」とは、「他者との心の通い合い、人格

と人格の結びつき」であり、「心の通い合い、それは、利害関係や、ある理念で相互に結ばれている関係ではなく、それらの関係を越えたところを開ける純粋な直接的な心の交流であり、そうした心の通い合いによって他者と共にあることである」という。⁽²⁶⁾そして、出会いの条件として、「孤独」と「待つこと」を挙げている。即ち、「孤独」とは、「自己閉鎖的に他者と隔てを置いて一人あることではなく、自己開現的に二人共にあろうとすることにおいて、それがいまだ実現されていない一人あること」であり、⁽²⁷⁾「待つこと」とは、「常に心を開いて出会いの到来を従容として待つということ」であるという。⁽²⁸⁾そしてまた、「出会いはまさに人間のはからいの圏域外に存する出来事である」という。⁽²⁹⁾尚、谷口は本書においては、人間と人間の出会い、及び、仏と人間との出会いに限定し、「もの」との出会いについては一応問題外におく、としている。しかし、本というものは人間の精神の反映、人格そのものではないかもしれないが、人格の反映ではあり得るとすれば、当然、本との間にも出会いは生ずるものと考えてもいいかと思うのである。

この小論で、本との出会いという場合は、ボルノウや谷口のいう出会い概念を考慮に入れつつ、ある人が、ある本、或いは、ある本の一部を、たまたま読むことによって、心に衝撃を覚えたり、心が攪乱させられたりして、それまでの生き方、つまり、考えや行動の再考をせまられ、その結果、その後の人生のある期間、又はその後の人生の全てに渡って、その人の考えや行動の上に大きな影響が及んだ場合を意味することとしたい。

3 人間形成について

次に、人間形成という言葉について一言触れておきたい。この人間形成という言葉も、昨今とみに目につく言葉のように思われるが、その意味するところは何なのであろうか。私の見るところ、人間形成という言葉の意味は、それをを用いる人によって必ずしも同じではないように思われる。即ち、ある人は、人間形成という言葉に教育という言葉と全く同じように用い、また、ある人は、人間形成という言葉に教育という言葉とは区別して用いているようである。⁽³⁰⁾『新教育学大事典』を見ると、「人間形成という語の意味は、教育概念とともにそれらの語が示そうとする現象の複雑さと多面性に依りて多様である」としたうえで、「教育とは基本的には人間が自立した責任主体として形成を遂げるまでの外部からの援助活動を表すとするならば、形成という語は、むしろ人間が生きているかぎりおのれの課題として自覚されるべきいとなみを表すというように区別することもできる」としている。⁽³¹⁾

私は、人間形成という言葉は、広く捉えれば、生命の誕生からその死に至るまでの全ての身体的、精神的成長を含む変化の総体と考えることができているが、しかし、本論では、一言で言って、人間がその人間になること、つまり、前述したように、ある人間が、ある思想、ある考えを持ち、ある行為、ある行動をとり、ある態度、ある姿勢を示すようになることを、人間形成という言葉で捉えておきたいと思う。

では、人間は如何にしてその人間に形成されるのであろうか。これは、教育の根本的課題であって、そう簡単には答えの出せるものではないであろうし、また、それを追求することは本論の目的でもない。しかし大雑把に言えば、平凡ではあるがやはり、次のように言えるのではないであろうか。即ち、人間がその人間になるには、いろいろな要因が複雑に関わってくるが、結局は、遺伝的要素と環境的要素との複雑な絡み合いによって人間は形成されると。

歴史家トインビーは「人間が形成されるのには、三つの要素が重要な役割をはたす、それは、⁽³²⁾ 遺伝と環境と本人の努力である」と言ったそうであるが、確かに、人間がその人間になるには、いろいろな要因が複雑に関わってくるであろう。しかし、トインビーの言う「本人の努力」というのは、結局のところ、その人の遺伝的素質とその人の周囲の環境に依存するとすれば、つまり、努力するとか、努力できるというのも一つの（潜在的な）能力であり、その能力が芽生えるのも、開花するのも、開花しないのも、結局は、周囲との関わりによるとすれば、残る要素は大きく分けて、やはり、遺伝と環境ということになるであろう。つまり、遺伝的形質を基礎としつつ、それを取りまく環境が複雑に絡んでその人間が形成されるのだ、と考えられるということである。

勿論、昨今のように、科学技術の進歩が顕著であれば、遺伝子の操作というようなことも近い将来により可能になるかもしれない。そうすれば、あるいは、遺伝的要素の役割というものを考慮する必要がより少なくなる事態となるかもしれない。しかし、原則的に、遺伝的要素というものには人為を及ぼすべきではないというような考えを採るとすれば、残るのは環境だけである。だとすれば、結論的には、人間は環境との交渉を通じてその人間になっていく、つまり、その人間に形成されていく、ということになるのではないだろうか。生物学者八杉龍一は、端的に、「人間は環境のなかで、環境と対面し交渉しつつ、自己を形成するものである。言葉も知識全体も情操もみなそうで、いわば環境が人間を作らせる」と言っている。⁽³³⁾

ところで、この環境というものをもし幾つかに分けるとすれば、自然的環境、事物的環境そして人間的環境の三つに分けることができるであろう。勿論、人がある地域に住み、その地域の中にある、ある家に住み、その家の中でもある人々に囲まれて生活する以上、環境を明確に三つに分けて考えることはできないかもしれないが、敢えて分ければ、三分して考えることは可能であると思うということである。尚、ここに言う自然的環境とは、山や川といった自然的地形や気候は勿論のこと、個々の建物には注目しない、全体としての建物を含む地域の総体をも意味している。また、事物的環境と言う場合の事物とは、一言で言えば、文化財のことである。人間的環境とは、個々の人間は勿論のこと、家族のような集団をも意味している。

以下、幾つか、断片的ではあるが、環境が、人間形成、ひいては人生そのものに与えた影響についての告白の例を挙げておきたい。何故なら、これらの例によって、ある程度は環境と人間形成との関わりについての自覚が推察されるのではないかと思うからである。

まず、作家広津和郎が自己の性格形成に言及していると思われる部分を彼の自伝『年月のあし

おと』から引用したい。これを読むと、総体としての地域的環境が性格の形成にまで影響を及ぼすことがあるというのが分かるのではないだろうか。『年月のあしおと』には、次のように書いてある。⁽³⁴⁾

「人の記憶や思い出に関係なく、変貌を重ねて行くこの東京という大都会の非情さに、われわれは馴れっこになり、無感動になってしまっている。これが明治の植民都市東京をめがけて各地から集まってきて、借家から借家を転々とした人達を親に持ち、東京で生まれ東京で育った子供等——即ち二世等の多くが感じる白々しさ、自分等には故郷がないという白々しさである」「小さな借家から借家を転々として居所が定まらずに育った庶民の子供等には、故郷の観念はないのである」「私などはそう云う意味で故郷の観念のない人間の一つの典型かも知れないし、そのことは自分の性格を考えて見る上で重要な点ではないかと思う。心の底の何処かにヴァガボンドが住んでいるような気が、私は子供の時分からしていたものである」と。つまり、「故郷がない」という環境に育ったことが、広津和郎の場合には、「心の何処かにヴァガボンドが住んでいるような気」のする人間に形成したということであろう。また、劇作家北条秀司は、『私の履歴書』の中で、友達に誘われて遊里に行っても「わたしは大阪の花街界限に育ったため、商売女の生理を嫌悪する本能みたいなものを身につけていたので、出会った女の生態や境涯を観察するほうがおもしろかった」と述べているが、⁽³⁵⁾これも、要するに、ある人にとっては、ある地域環境に育つことが、ものの見方や考え方、そして行動にもある種の影響を与えるのだ、という例かと思われる。さらに、元女優山口淑子の例にも触れておきたい。山口淑子は、中国大陸、炭鉱の街・撫順に生まれ、十三歳で当時の満州第一の都会、政治、経済、文化の中心地、奉天に転居したという。奉天は、中国風、西洋風、日本風の建築物が入り乱れ、また、欧米諸国の領事館や商務館のひしめきあう一大国際都市で、人種も多種多様、アジア民族だけでなく、白系ロシア人、トルコ系ロシア人、アルメニア人等もいたという。従って、「奉天の街の生活や人間関係は、きわめて国際的な空気につつまれ」ていて、「そうした国際色豊かな環境は、その後の私の人生に大きな影響を与えたような気がする」と、自伝『李香蘭私の半生』に書いている。⁽³⁶⁾確かに、日本人であっても、中国映画やアメリカのミュージカルに出演し、国際結婚の経歴を持つ等、一つの国にこだわらない山口淑子の生き方は、環境が大きく影響しているという彼女の言葉を実証しているように思われる。

次に、学校という、事物的、人的環境が人間形成に関わるとする告白の例を紹介したい。元外務大臣で実業家の藤山愛一郎は、慶応幼稚舎から府立一中の受験に失敗し、結局、慶応の普通部に進学したが、その普通部について、藤山愛一郎は「普通部に入ってみると自由な空気の中で形式ばらない指導を受け、私が今日ある基礎を築く結果となったのである」と述べ、⁽³⁷⁾また、紀伊国屋書店の創業者田辺茂一は、小学二年から、中学五年までの十年間通った高千穂学校について「この学風や環境が、私の人間形成上、大きく影響し」そして「ここの学校の校風が、大きく私の

性格を作った」と述べている⁽³⁸⁾。勿論、これらの記述だけでは、「自由な空気」「形式ばらない指導」が、具体的にどのように藤山愛一郎に影響したのかは分からないし、「学風」「校風」が、田辺茂一のどういう性格を作ったのかも不明ではあるが、とにかく、本人は影響を受けたことを自認しているのである。だとすれば、彼らにとっては、学校という環境が大きな形成力を持っていたということは確かであると思われる。

以上、環境が自己の人間形成に関わったとする例を幾つか見てきたわけであるが、一定の環境が常に一定の形成をするわけではないのは勿論である。何故なら、受け止める個性は多種多様であるし、受け止め方も多種多様であるからである。

さて、人間の形成は、今述べたように、三つの環境との交渉を通じて行われると考えられるが、その形成は、一般的には、徐々に進むものかと思われる。が、時として、人間は何かを契機に飛躍的に変貌、変化することもあるのではないだろうか。つまり、何かを契機に新たに方向を定めたり、今までの方向を改めたりすることもあるのではないだろうか。言葉を換えれば、人は何かを契機に飛躍的にその人になっていくと言ってもいいかもしれない。例えば、近親者の死、家の破産・崩壊、大病等を契機にである。それらを契機に、新たな一步を踏み出す、新たに決意する、考え方を変える、行動を変える、考え方が変わる、行動が変わるということである。つまり、これらの契機が人生に大きな影響を及ぼすということである。例えば唐木順三によれば、道元の古い伝記には、道元は「慈母の喪に遇って、香火の煙を観じて、ひそかに世間の無常を悟って、深く求法の大願を起し給う」と書いてあるという⁽³⁹⁾。これは、母の死が仏道への契機であったということであろう。また、元横綱大鵬は、三十六歳で突然脳梗塞に倒れ、闘病生活を余儀なくされたわけであるが、闘病生活をするうちに、「妻のこと」や「弟子たち」のこと等、「人間の気持ちがよくわかるように」になったという。そして、また、闘病生活は、自分の「ワンマンぶりを深く反省する機会」にもなったという⁽⁴⁰⁾。つまり、大鵬にとっては、病気が「人生の転機」となり、同時に、人間的視野を広める契機ともなり、また、人間としての生き方を考える契機ともなったということかと思われる。また、場合によれば、その契機は、ほんの「ひとこと」かもしれないのである。女流棋士小川誠子は、中学二年で全日本女流アマ選手権で優勝した後、木谷実「道場へ遊びにきませんか」と言われたのが、「私の生涯にとって決定的ともいえる瞬間」だったという⁽⁴¹⁾。「道場へ遊びにきませんか」の一言がなければ、木谷道場には入門しなかったかもしれないのである。だとすれば、今の小川誠子五段はなかったかもしれないし、また、「碁だけ上達すればいいというものではない」と言って、戸の開け閉め、座り方などの行儀作法まで教えてくれた、木谷夫人にもめぐり会わなかったかもしれないのである。ともあれ、彼女にとっては、「道場へ遊びにきませんか」の一言が人生における一つの契機になったことは確かかと思われる。さらにまた、何かとの出会いという契機が、その人の生き方に大きく関わることもあるのであろう。前記『出会いについて』には、人、宗教、自然、社会、芸術等との出会いの例が多々挙げられている。

作家の中山義秀は、早稲田の予科に入学して、横光利一に出会ったことが自分の将来の決定に繋がったし、「横光は文学にたいして、私を開眼させてくれたばかりでなく、野生の子猿を訓練してくれた、無類の調教師でもあった」と、『私の履歴書』で言っている。⁽⁴²⁾元々は作家志望ではなかった中山義秀が作家になったのには、横光利一との出会いが契機になったと言ってもいいのではないだろうか。

以上、人間の形成に関わると考えられるいろいろな環境、いろいろな契機、いろいろな出会いがある中で、ここでは本との出会いという契機を採り上げ、本との出会いの人間形成的意味、つまり、その人間になるについて、本との出会いがどう関わったのかも見ていきたいということである。

4 本との出会いについて

本との出会いが、人生に与える衝撃や影響の大きさについては『出会いについて』の中でいくつか例が挙げられている。例えば、アウグスティヌスとキケロの哲学的対話篇『ホルテンシウス』の場合、ニーチェとショーペンハウエルの『意志と表象としての世界』の場合、そして辻邦生とトーマス・マンの『ブッデンブローク家の人々』等の場合である。⁽⁴³⁾これらはいずれも、「一冊の本との出会いが、想像もできないような衝撃的影響を与えた」例として紹介されている。⁽⁴⁴⁾

また、知識人や著名人の読書体験をまとめた本などを読むと、一冊の本との出会いに感激したことやその本の影響の大きさについて述べた例は多々みられる。例えば、新聞の連載記事を纏めた『一冊の本』という本の中で、演劇評論家武智鉄二は、豊竹山城少掾に勧められた、杉山茂丸『浄瑠璃素人講釈』を読んだ時のことを次のように書いている。

- ・「『はしがき』と題する序文に、まずガツンとやられた」「あとは、警策でめった打ちにおちめめされているような気持で、本文四一七ページを、三昼夜にわたって、読みふけた。それから当分のあいだぼうぜんとして、一カ月ばかり、たましいがどこにあるとも分からぬ状態で、読みかえし考えつくした」「私がもし今日、古典演劇の研究者として、ある特異な地位を劇界や学会で占めているとするならば、それはすべてこの一冊のおかげなのである」。⁽⁴⁵⁾

また、『統一冊の本』という本の中で美術評論家嘉門安雄は、美川きよ『夜のノートルダム』の読後感を次のように述べている。

- ・「読み終わって、私は茫然とした。いや、なんのためらいも、わだかまりもなく、ひたすらに感動した。そして、このような感動に茫然としたのである」。⁽⁴⁶⁾

更に、これも新聞の連載記事を纏めたものである『忘れられない本』という本の中で、映画監督山田洋次は、監督として一本立ちになった頃買った現代日本文学大系の『柳田国男集』を読んだ時のことを次のように述べている。

- ・「その夜、アパートの机の上でこの本の扉をめくり、最初のページの一行目を読んだ時の、ハッ

として眼が覚めるような新鮮な印象を、私はいまだに忘れることができない」「柳田国男が俳句について語る言葉は、実は自分が身を置く映画を含めたすべての芸術についてあてはまる真実なのではないか、とまるで眼から鱗がおちるような思いで深夜までページをめくり続けた日のことを、私は今でもまざまざと憶えている⁽⁴⁷⁾」。

このような本との出会いに感激する例は他にもいくらかあるであろう。しかし、こういった読後の感激、衝撃の告白の中には、その本を手にするに至った状況やそれを読んでどうなったか、つまり、その体験が当人のその後の人間形成のどの面において、どのように関わったかというようなことについては、紙幅の関係もあろうが、あまり詳しくは触れられていない場合が多いように思われる。従って、そういった告白は、本論で言う意味での、出会いの例として取り上げてよいのかどうかは疑問の残るところかと思われるので、取りあえず、それはそれとして置き、ここでは、その本との出会いの状況やその後の人間形成への関わりにまで（比較的）詳しく触れていると思われるものとして、作家尾崎一雄の「自伝」における本との出会いを採り上げてみたい。つまり、尾崎一雄が、ある本との出会いを通じて、作家尾崎一雄になる過程を「自伝」を材料に検証してみたいということである。

さて、尾崎一雄には自己を語るものとして、広翰な、文学的回想記『あの日この日』（上）（下）『続あの日この日』や『私の履歴書』等があるが、ここでは主として『私の履歴書』によって、尾崎一雄における本との出会いと、その後への影響を明らかにしてみたい。というのは、『あの日この日』（上）（下）『続あの日この日』の方は「文学的自伝」、つまり、「同時代文学史」的である⁽⁴⁸⁾のに対し、『私の履歴書』の方が非文学的であると思われるし、また、ここで主として問題にする事柄について、『私の履歴書』の方が時期的に後に書かれていると思われるからである。が、その前に、作家尾崎一雄について少しだけ触れておきたい。

尾崎一雄は、明治三十二年に、父親の任地、今の伊勢市に生まれ、父親の実家のある小田原郊外や母親の実家のある沼津を経て、小学校三年からまた父親の実家のある小田原郊外に移り、そこで少年時代を過ごした。その後、早稲田大学に学んで、卒業後は作家として生涯を送った人である。三十七歳で『暢気眼鏡』により芥川賞を受賞し、その後は野間文芸賞を二回も受賞している。しかしその実生活は、親の財産を早々に食いつぶし、後は、私小説作家によくある、「貧苦と女性関係と制作上の悩み」の中にあつた時期もあつたようである⁽⁵⁰⁾。

文学に関しては、尾崎一雄が志賀直哉と切っても切れない関係にあることは周知のこのよう⁽⁵¹⁾で、彼は、「志賀直哉によって文学眼開かれ⁽⁵²⁾」、「志賀直哉を生涯の師と仰⁽⁵³⁾ぎ、志賀直哉に「心酔」していたとまで言われている。そのことは、尾崎一雄自身充分に認めるところで、志賀作品に接したことが「私流の文学開眼ともいふべき出来ごと」であると彼も述べている⁽⁵⁴⁾。そして、この志賀直哉と尾崎一雄との繋がり⁽⁵³⁾のきっかけこそが、実は、この小論の主題である、本（ここでは一篇の小説）との出会いによるものなのである。即ち、その出会いには、偶然性があり、「宿命的」

なものがあり、「茫然自失と言っていいほどの感銘」⁽⁵⁵⁾、「心の底から揺り動かされる」感動があり、「⁽⁵⁵⁾動揺」があり、そして新しい目覚めがあるのである。尾崎一雄は、その出会いによって、将来の生き方にまで影響を受けたのである。以下、尾崎一雄の志賀直哉の本との出会いについて、少し明らかにしたい。

尾崎一雄の自伝『私の履歴書』によれば、尾崎一雄の家（小田原市郊外下曾我）は代々近くの神社の神官をしていた家柄であったが、父親の代になって、父親は神主の職を辞めて神宮皇学館に勤めたという。父親は東京帝国大学の国史科を出た人であり、また、家柄がそういう家柄であったので、家には国史、国学、国文学関係の蔵書は沢山あったという。尾崎一雄の書くところによれば、彼は、小学校三年の時から新聞を読み始め、小学校の上級生になった頃というから、十一、二歳の頃には、家にある本や古雑誌に手を伸ばし始め、そして、中学校の四、五年の頃になると、蔵書の大体はあさり尽くしてしまったという。その後は、その父親が代議士をしていたという近所の友人の家にまで進出し、その家の蔵書にまで手を広げたという⁽⁵⁶⁾。その家の蔵書は、土蔵の中にあって、彼はその土蔵の中で運命的とも言うべき本に出会うことになる。『私の履歴書』には、次のように書いてある。「そこで発見した一冊の古雑誌が、私の生涯を決定した。『生涯を決定した』という言葉に、一切の加減乗除はない。世の中には恐ろしいことがあるものだ。その恐ろしいことが不意打ちで私を襲った⁽⁵⁷⁾」と。

その「不意打ちで私を襲った」一冊の古雑誌というのは、『中央公論』第二十七年第九号秋期大付録号」のことである。勿論、同じ『中央公論』がほかにいくらかでもあったし、また、他の雑誌もあったという。しかし、彼によれば、「まるで磁力を帯びてでもいるように私を惹きつけて離さなかった」のが、大正元年九月号の『中央公論』であったという⁽⁵⁸⁾。この「生涯を決定した」本（ここでは雑誌）との出会いは、尾崎一雄の表現によれば、「不意打ち」である。ということは、その出会いは思いも掛けなかった偶然であり、「まえもって予見することもでき」なかったこと、ということであろう。「バック・ナンバーが沢山あった」中で、彼は『中央公論』第二十七年第九号秋期大付録号」に「まるで磁力を帯びてでもいるかのよう」に惹きつけられたのである。何か不思議な運命の糸が二者を結びつけたということであろうか。敢えて、「惹きつけて離さなかった」理由を推測するとすれば、それは「大付録号」と銘打ってあったことが、なにがしか、期待を持たせそうであったこと、また、見開きの目次の中に、島崎藤村、正宗白鳥、徳田秋声等の「大家や流行作家」と並んで、初見の志賀直哉の名があったことであろう。『私の履歴書』によれば、「大正四、五年の頃は」「私はいっばしの文学少年になっていた」し、「『新潮』『文章世界』『中央公論』によって、当時の作家たちのものをよく読み、殊に新進の人たちの作に深く興味を覚えていた⁽⁵⁹⁾という。また、『あの日この日』（上）には次のように書いてある。「『中央公論』の古雑誌に並んだ小説家の名前は、森鷗外はじめ長田幹彦に至るまで全部知ってたが、ただ一人志賀直哉だけはどこのどういふ人かまるで判らなかつた⁽⁶⁰⁾」と。つまり、彼からすれば、こんなところ

に、俺の知らない作家がいる。しかも、一緒に書いている連中は先刻ご承知の人ばかりではないか、俺としたことが見逃していたのであろうか、おかしい、というところであらうか。

ところで、その一冊には志賀直哉の何が載っていたのであろうか。そこに掲載されていたのは、『大津順吉』という小説であった。尾崎少年はこの初見の作家の作品を多分興味津々で読んだに違いない。何故なら、今述べたように、自分にとっては初見の作家の作品が、「大家や流行作家」の作品と正々堂々肩を並べて掲載されていたからである。『私の履歴書』には、その時の感想が、次のように書いてある。「私は『大津順吉』を読んだ。感動した。小説というものによって、これほどの感動を与えられることがあるのかと驚いた」と。⁽⁶¹⁾また、『志賀先生のこと』という文章の中では、「『大津順吉』といふ今で云ふ中編小説を読み、私は茫然としたと云っていいほど打たれてしまった」とも述べている。⁽⁶²⁾ともかく、尾崎一雄が如何に『大津順吉』に感動したかは、『大津順吉』との出会いを如何に多く語ったかと、彼自身が書いているのを見れば分かるのではないかと思う。⁽⁶³⁾

尾崎一雄は『大津順吉』の何に感動し、何に驚いたのであろうか。彼は、それについて『私の履歴書』の中では二つのことを挙べている。即ち、「先ず第一に驚いたのは、書かれていることが、つまり作者の言いたいことが、そのままこつちに入つて来るという点である。書かれていることと、読む者との間に、膜のようなものが全く無いのだ。こういう文章には、初めて出会った」、「次に私は、主人公順吉なる青年の、父親に対する反抗の勇敢さに驚いた。大したものだ、と敬服した」と。⁽⁶⁴⁾但し、『あの日この日』(上)では、少しニュアンスの違う表現になっているようである。即ち、『あの日この日』(上)では、「感動の主な誘因」は次のように書かれている。「小説といふものを、大体に於てあることないことつき交せて読者を喜ばすもの、と思つてゐた私を、さうとばかりも言へないぞ、と考へ直させたことが第一、次に、父親に不服があるのなら、それを勇敢につき出せ、と訓へられたこと——この二つが感動の主な誘因であつた」と。そして、それに付け加える形で、「文章にも驚いた。かういふ文章には初めて出逢つた。描かれたことと、読む者との間に、邪魔ものが一つも無いと思つた」と。⁽⁶⁵⁾また、『志賀直哉先生のこと』や『世に出るまで』という文章の中では、『大津順吉』を小説の概念をひっくり返したもの、つまり、あること無いことを取り混ぜて面白く書いたものではなく、本当のことを書いた小説もあるのだと認識させたものとして評価しているようである。⁽⁶⁶⁾だとすれば、感動の要因は三つということになるだろうか。ともあれ、尾崎一雄は『大津順吉』を読むことによって、「従来 of 観念で予期していたのとはまったく異なったもの、したがって、あらたに立場をさだめることをかれにせまるもの」(ボルノウ)に、正に、出会ったと言つていいのではないだろうか。

では、『大津順吉』とはどういう小説なのであろうか。この『大津順吉』という小説は、「順吉を直哉と置き換へれば、書かれていること、すべて事実で」、⁽⁶⁷⁾「作者の直接経験にそつた小説」だといふ。つまり、これは所謂私小説であるわけだが、この小説の輪郭だけを言えば、主人公大津

順吉の「二人の女性との出来事、それをめぐる家族との葛藤」ということになるであろう。⁽⁶⁹⁾しかし、本多秋五によれば、その内容は、「破戒の書」であり、「牢固たる確信犯の書であり、志賀直哉におけるこの人を見よである」という。つまり、この『大津順吉』は一面において、昨日までのピューリタンが、そのままのピューリタンの戒律を破り、わが行く道は正しい、俯仰天地に恥じるところがないとの誇りをもって背教者になる物語で、「とにかく、この小説によって、志賀直哉の自画像作家への道が決定されたのである」という。⁽⁷⁰⁾とすることは、この『大津順吉』という小説は、志賀直哉の自己形成にとってもまた重要な意味を持つ作品ということになるであろう。

しかし、この『大津順吉』は、一般的には必ずしも、それほど注目もされず、評価もされなかった小説のようである。⁽⁷¹⁾にもかかわらず、この小説は尾崎一雄には一生を支配するほどの大きな衝撃を与えたわけである。何故、この小説は彼にとってそれほど大きな衝撃になったのであろうか。尾崎一雄自身は、前述したように、『私の履歴書』の中では、感動の理由を二つ挙げているが、その中では、第一の理由よりも、第二として挙げられている理由の方がより大きい要因であるように私には思われる。何故なら、小説の主人公大津順吉と読者尾崎少年との置かれた状況が似通っていたことが、この際には大きな役割を果たしていたと考えられるからである。だからこそ、一生を支配する程の影響になったのではないかと思うのである。即ち、当時の尾崎少年は、進学問題で、父親と意見を異にしていた。尾崎少年は、早稲田大学に進学して、文学を勉強したいと考えていたが、父親は、「軟文学」に反対で、また、早稲田大学は社会主義の学校という理由で、絶対反対であった。『大津順吉』の場合は、結婚問題が対立の要因であるので、事柄の内容は違うが、ともあれ、こういった父親との対立・抗争に対し、『大津順吉』の主人公は勇敢にも不服を申し立てて抵抗した。しかし、尾崎少年の場合は、「自己を押し通すこと」が出来ない、というのが結論であった。従って、自分にそれが出来たら、という思いが殊の外強かっただけ、衝撃も大きかったのではないだろうか。もし、父親に、文学に対する理解があったとしたら、そしてまた、早稲田に入ることに反対でなかったとしたら、如何に文章に感心したとしても、尾崎少年がこの『大津順吉』にこれほど大きな影響を受けることはないように思われる。『あの日この日』(上)の中で、尾崎一雄は、『大津順吉』について「父親とのあらしひといふ、私にとつてぴつたりの題材が扱はれてゐ」たと認めている。⁽⁷²⁾つまり、尾崎一雄の場合、「共在への切なる願いがある」にもかかわらず、「それがいまだ実現されていない」「孤独」(谷口)な状況にあったということが、『大津順吉』に感動する大きな要因になったのではないだろうか。

ともあれ、『大津順吉』に感動した尾崎少年は、それまで評価していた「夏目漱石も良いけれど、漱石より年齢的に近い志賀直哉の方に一層の親しみを覚え」、「この人の書くものは、一つも残らず読んでやろう」と決心することになる。それは「何か熱にうかされたようだった」という。⁽⁷³⁾そして、「自分は志賀直哉の文学に感動した」「自分は自分が志賀直哉の作品から受けたと同じような感動を人に与えることのできる作品を書きたい。そのほかのことはしたくない」「学校を出る

までの何年間を、すべてその方の勉強に打込もう」と決意するに至るのである。⁽⁷⁴⁾やがて彼は進学問題に一つの結論を出すことになる。その結論とは、父親の勧める神宮皇学館には絶対行かない、しかし、これも父親の勧める第一高等学校は受ける、さらに第一高等学校の不合格に備えて、東京の早稲田以外の学校を受取る、というものであった。『私の履歴書』によれば、「ここまで肚を決めたのは、踏んぎりの悪い私としては大出来で、この勇気を与えてくれたのが『大津順吉』であった」という。⁽⁷⁵⁾これらの言動を見ても、『大津順吉』の影響が如何に大きいかはわからないだろうか。

第一高等学校は不合格に終わったが、上京することの出来た尾崎一雄は、法政大学に籍を置きつつも、授業には出ずに、図書館通いに励み、小説類を読みあさったという。その後、父親の死亡に伴い、家長となった彼は、思いどおりに早稲田に入り、文学に熱を入れることとなる。当時彼がどれほど志賀直哉に熱を入れていたかを少しみてみたい。

早稲田に入った尾崎一雄は、回覧雑誌の仲間と話をするうちに、みんなが志賀直哉を読んでいないのに驚き、腹を立て、情けないと思い、『大津順吉』を五、六冊、自腹を切って買い求め、「これを読まねば話にならぬ」と言って、みんなに押しつけたという。⁽⁷⁶⁾また、「教室に居る時間より、古本屋に居る時間の方が確実に長く」「東京中の古本屋を歩き廻った」という尾崎一雄は、漱石や芥川をはじめとして色々な作家の初版本を買いあさったりしたわけであるが、一番熱を入れたのは、勿論、志賀直哉に関するものであった。『初版本の思ひ出』には、次のような記述がある。「氏の作品は私にとっては聖典であつた。それで、氏の作とあれば、どんな片々たるものでも見のがさなかつた。既刊本は勿論、新聞雑誌に出る小さな感想、葉書回答の類までのがさなかつた」し、東京中の古本屋を回って「『大津順吉』の出てる『中央公論』を捜しあてたときなど、嬉しくて一晩寝られない程」だった。⁽⁷⁸⁾また、志賀直哉の第一創作集『留女』の場合などは、古本屋巡りの最中に、目につくごとに買い、「一時は六冊持っていた」という。⁽⁷⁹⁾

これらのことだけでも、尾崎一雄が如何に志賀直哉に夢中になっていたか、如何にのめり込んでいたかが分かるのではないだろうか。尾崎一雄にとって志賀直哉の作品は、正しく、「聖典」であり、「太陽」であったということであろう。⁽⁸⁰⁾特に、『留女』の場合など、如何に入れ揚げているとはいえ、同じ本を六冊も揃え、それを読み、眺めていたとすれば、これは、尋常ではない惚れ込みようと言えそうである。

これほどまでに志賀直哉に熱中していた尾崎一雄は、やがて友人の手引きで京都に志賀直哉を訪ねることになる。その時の感激はまたひとしおであったようである。一言で言えば、彼は、志賀直哉に会って感涙に咽んだのである。『私の履歴書』には、「泣くなんて、と思っても、涙があとからあとからと出てくる。どうにもしかたがなかつた」と表現されている。⁽⁸¹⁾

訪問の結果、年一度の訪問を許され、「望蜀の願い」の叶った、尾崎一雄は、以後も、志賀作品を「聖典」とも「太陽」とも頼み、作家としての道を突き進むことになるのである。彼が言う

ように、『大津順吉』に逢わなかったら、尾崎一雄は小説家になっていたかどうか疑問なのである。⁸²
この項を終えるに当たり、尾崎一雄自身が『私の履歴書』に引用している次の文を紹介しておきたい。

「ともかく、この作家は、志賀直哉を知ることによって始まった。志賀直哉を知らなかったら、尾崎文学は質の違ったものになっていたろうなどということとはできない。志賀直哉を知ることなしには尾崎文学は生まれなかったに違いないのだから。実際、あの真剣な志賀文学との出会いがなかったら、この作家は小説というものを軽蔑したまま、そのようなくだらぬ娯楽に自ら手を染める気などさらさら起こらなかったはずなのだ。⁸³」

5 終わりに

以上、人間の形成に関わると考えられるいろいろな出会いの中で、本との出会いの例を作家尾崎一雄の場合に見たわけである。かつて、中野好夫は、「一人の作家の魂が形成されてゆく過程というもの、きわめて複雑、微妙なものであることはいうまでもない。もちろんもっとも大きな要因は、その作家自身もって生まれた固有の個性、稟質であることに間違いないが、しかし他面には、少年時代からの経験、読書というようなものに基く、外からの要素も決して無視することはできない。とりわけそれが文学の場合では、その国伝来の遺産である過去の文学、同時代の文学、そうかと思うとまた外来異邦の文学が、それぞれ直接にあれ、間接にあれ、きわめて微妙な影響を与えるものであることは、十分に考えられる」と指摘したが、⁸⁴尾崎一雄の作家としての魂の形成にあたっては、確かに、「その作家自身もって生まれた固有の個性、稟質」があったには違いないであろう。しかしまた、そこには「少年時代からの経験、読書というようなものに基く、外からの要素」、とりわけ、「同時代の文学」である、志賀直哉の『大津順吉』との出会いが大きく影響したことも間違いのないのではないだろうか。勿論、尾崎一雄が志賀直哉の『大津順吉』に出会わなかったら、作家にはならなかったかどうかというようなことは、分からないと言えば分からないことである。何故なら、私たちは、当然のこととして、過ぎ去った日に再び戻ることはできないからである。しかし、尾崎一雄は、なにはともあれ、志賀直哉の『大津順吉』に出会ったのである。これが作家尾崎一雄になるにあたっては決定的なことだったのである。

この小論は作家尾崎一雄の場合を一つの典型として挙げたわけであるが、このような本との出会いは、私たちにも起こりうることとして教育の場でも考えるべきことかと思われる。重ねて言えば、本との出会いの持つ人間形成的意味の重要性を改めて認識すべきだと思う、ということである。本を読むという行為は、見たり、聞いたりすることとは違い、何はともあれ、能動的な行為である。教育の場においては、もっと奨励されて然るべきことかと思うのである。

尚、本研究は、跡見学園の留学規定に基づく国内留学（留学先、早稲田大学大学院教育学研究科、市村尚久教授）のまとめの一部である。機会を与えていただいた学園当局等に謝意を表した

い。

- 注(1) 佐伯彰一『日本人の自伝』（『昭和文学全集』28, p.772-7, 小学館, 1989）
- (2) 小島直記『小島直記伝記文学全集』（中央公論社, 1987）第12巻, 月報11, 「小島塾講義録」
- (3) 佐藤春夫, 『私の履歴書』文化人1, p.78, 日本経済新聞社, 1983
- (4) 里見弴, 同上, p.9
- (5) 例えば, 佐伯彰一『近代日本の自伝』（p.92）によると, 『青木周蔵自伝』には, 彼が養子であり, 日本人の妻があったにもかかわらず, 敢えて離婚して, ドイツ人女性と再婚したという「切実な私人としてのドラマ, 家庭劇は, 彼の自伝からは一切きれいに消し去られている」ということである。
- (6) 室生犀星は, トルストイが自伝の中で, 産湯の記憶を述べていることについて, 「いくら偉大なこの人でも産湯の覚えを記憶しているとは思えない」としているが（『私の履歴書』文化人1, p.44）, この「産湯の覚え」などは, 思い込み, 或いは, 創作の一例かと思われる。
- (7) 佐伯彰一『近代日本の自伝』p.101, 講談社, 1981
- (8) 小林司『出会いについて』（NHK ブックス, 1983）の中で引用されている辞書のうち, 本論では借用した部分は, 日本語では, 『広辞苑』第二版(1969), 『日本国語大辞典』（1975）, 英語では, 『研究社新英和大辞典』第五版(1980）, OED (1933）, 独語では, 『木村・相良独和辞典』（1963）, ドゥーデン『ドイツ語大辞典』（1976）, 『仏語大辞典』（1981）である。
- (9) 同上, p.46
- (10) 尚, 『出会いについて』に引用されている辞書より後で出版されたもの（例えば, 『言泉』小学館, 1986, 『大辞林』三省堂, 1988, 『日本語大辞典』講談社, 1989, 『広辞苑第四版』岩波書店, 1991）を見ても, 「であい」「であう」の意味自体には大きな変化はみられないようである。ただ用例の中に「出会いの結果おこった自己への心理的影響をも言外の意味に含む」例として, 「良書との出会い」「彼と出会ったことが私の人生を変えた」が載ったもの（『言泉』小学館, 1986）のあることは注目してよいことだと思われる。なぜなら, このことは, 「であい」の意味として, 単なる二つのものの「であい」だけではなく, それのもたらすその後の結果, 効果というか, 精神的意味, 価値が認められはじめた, ということの意味していると思われるからである。つまり, 「心と心の触れ合い」も, 「出会い」の意味として認知されたということになるわけだからである。
- (11) 小林司, 同上, p.51.
- (12) 例えば, 『言泉』小学館, 1986, 『大辞林』三省堂, 1988, 『日本語大辞典』講談社, 1989, 『広辞苑第四版』岩波書店, 1991
- (13) 広津和郎『年月のあしおと』（『日本人の自伝』16, p.107, 平凡社, 1981）
- (14) 朝日新聞「こころ」のページ編『私の転機』p.85, 冬樹社, 1981
- (15) 同上, p.81
- (16) 森繁久弥『森繁自伝』p.118, 中公文庫, 1984
- (17) 朝日新聞社編『忘れられない本』p.26, 朝日新聞社, 1979
- (18) 同上, p.118
- (19) 例えば, 「またバリでは髭を生やした老婦人に何人か出会った」（高橋義孝「こしかた」, 『自伝抄V』p.222, 読売新聞社, 1978）「なにしろ赤彦との出会いはおどろくほど古い」（上田三四二, 『私の読書術』p.240, かのう書房, 1984）, 「私の波乱万丈の半生の中でも, 二人の“師”との出会いがなかったら, 人形師としての今日の私は, 存在しなかったにちがいない」（辻村ジュサプロー, 前掲『私の転機』p.44）等。但し, 「通りがかりによい老人に出あうと, そこへ一日なり二日なり腰をおちつけて話を聞く」（宮本常一「二ノ橋界限」, 『自伝抄IX』p.75, 読売新聞社, 1980）というのものもある。
- (20) 即ち, 「私は, 本に出会うことに関して, まことに運のいい人間だと思っている」（森内俊雄, 前掲『私の読書術』p.234）, 「私は本との出逢（あ）いについては神秘主義者だ」（栗田勇, 同前, p.76）, 「好きな本に出遇うと……」（篠田桃紅, 注13参照）, 「近頃の文学研究の本のなかではこの言葉に頻繁に出会います」（中川久定『自伝の文学』p.10, 岩波新書, 1979）, 「……という言葉に出合ったとき……」（犬丸直, 前掲『私の転機』p.54）, 「それは私が翻訳の筆を進めていくうちに, 幾たびも私よりも年少であることがはっきりとわかるようなウインパーの文章に出あったからである」（浦松佐美太郎, 朝日新聞学芸部編『一冊の本』p.203, 雪華社, 1963）, 「しかし読まずに置いた本があとで頗（すこぶ）る貴重なものになる経験には度々出会った」（鳥尾敏雄, 前掲『私の読書術』p.74）, 「そのこ

- ろ偶然のぞいた現代美術館で、ユージン・スミス一枚の写真に出合った」(吉田ルイ子、前掲『私の転機』p.82)等となっていて、「出会う」対象が同じ場合でも、様々な表記があることが分かる。
- (21) 1992年の朝日新聞の連載記事に「出あいの風景」「自分と出会う」というのがあるが、同じ新聞でありながら、一方では「出あい」という表記をし、他方では「出会う」という表記をしている。これは多分対象に応じての使い分けということかと思われる。つまり、「出あい」の場合は、その対象は「ひと」でも「もの」でも「こと」でもよく、従って、「あい」はそれを受け取る人の受けとめ方によって、「会」でも「合」でも「逢」でも「遭」でも「遇」でも出あいあいでもよいということかと思われる。「自分と出会う」は、出会う対象が自分に限定されているので「出会う」という表記がされているのだと思われる。
- (22) ボルノウ、峰島旭雄訳『実存哲学と教育学』p.159-60、理想社、1966
- (23) 同上、p.160
- (24) 同上、p.162
- (25) 同上、p.208
- (26) 谷口龍男『出あいの哲学』p.2-3、北樹出版、1978
- (27) 同上、p.25
- (28) 同上、p.28
- (29) 同上、p.31
- (30) 例えば、前者の例は「……人間形成のもつ、すなわち教育というはたらきのもつ論理を……」(上田薫『人間形成の論理』p.1、黎明書房、1964)というような場合であり、後者の例としては、例えば、「教育は形成の一要因であって、前者が後者にとってかわることはできない」(宮原誠一『宮原誠一教育論集』第一巻 p.8、国土社、1976)というような場合である。
- (31) 森田孝「人間形成」(『新教育学大事典』第一法規、1990)
- (32) 竹之内静雄、雑誌『波』新潮社、1990年3月号
- (33) 八杉龍一「人間論への歩み」(前掲『自伝抄』Ⅸ、p.48)
- (34) 広津和郎、前掲『年月のあしおと』p.6.
- (35) 北条秀司、『私の履歴書』文化人5、p.463、日本経済新聞社、1983
- (36) 山口淑子・藤原作弥『李香蘭私の半生』p.41-2、新潮社、1987
- (37) 藤山愛一郎、朝日新聞「こころ」のページ編『続私の転機』p.110、冬樹社、1982
- (38) 田辺茂一、前掲『私の履歴書』文化人5、p.184、190
- (39) 唐木順三、朝日新聞学芸部編『一冊の本』p.9、雪華社、1963
- (40) 大鵬幸喜、前掲『私の転機』p.122
- (41) 小川誠子、週刊朝日編『わが師の恩』p.120、朝日新聞社、1992
- (42) 中山義秀、前掲『私の履歴書』文化人1、p.392
- (43) 小林司『出あいについて』p.21-5、NHK ブックス、1983
- (44) 同上、p.25
- (45) 朝日新聞学芸部編『一冊の本』p.187、雪華社、1963
- (46) 扇谷正造監修『続一冊の本』p.42、PHP 研究所、1978
- (47) 朝日新聞社編『忘れられない本』p.147、朝日新聞社、1979
- (48) 尾崎一雄自身が「回想録ふう」として『私の履歴書』の中で挙げているものは、『わが青喜放浪』とか『出世の頃』とか『世に出るまで』等である。
- (49) 佐伯彰一『尾崎一雄・人と作品』(『昭和文学全集』第11巻所収、小学館、1988)
- (50) 同上
- (51) 川崎長太郎『尾崎一雄一小説風人物論』(『現代日本文学大系』68所収、筑摩書房、1969)
- (52) 阿川弘之「志賀直哉」(第十回)(『函書』、1988年2月号、岩波書店)
- (53) 浅見淵『尾崎一雄論』(『現代日本文学大系』68所収、筑摩書房、1969)
- (54) 尾崎一雄『あの日この日』(上)、p.63(『尾崎一雄全集』第13巻、筑摩書房、1984、以下、『全集』第何巻とのみ記す)
- (55) 阿川弘之、前掲書
- (56) 『私の履歴書』文化人5、p.353-4、日本経済新聞社、1983

- (57) 同上, p.354
- (58) 同上, p.354
- (59) 同上, p.360
- (60) 尾崎一雄『あの日この日』(上), p.66, (『全集』第13巻)
- (61) 『私の履歴書』文化人5, p.355
- (62) 『志賀直哉先生のこと』(『全集』第9巻, p.17)
- (63) 尾崎一雄『あの日この日』(上), p.65, (『全集』第13巻)には、「『大津順吉』を読んでいかに感動したかは、これまでに度々書いてあるので詳説はしない」とある。
- (64) 『私の履歴書』文化人5, p.370
- (65) 尾崎一雄『あの日この日』(上), p.65, (『全集』第13巻)
- (66) 『志賀直哉先生のこと』(『全集』第9巻, p.173,)『世に出るまで』(『全集』第10巻, p.168)
- (67) 阿川弘之, 前掲書
- (68) 本多秋五『志賀直哉』(上), p.51, 岩波新書, 1990(志賀直哉自身も、『創作餘談』の中で『大津順吉』は「事実」と認めている)
- (69) 阿川弘之, 前掲書
- (70) 本多秋五, 前掲書, p.61, 70
- (71) 本多秋五, 前掲書, p.61には、「この小説は、発表当時にそうした主人公(大津順吉一注・筆者)の行動の意味が十分に理解されなかったばかりでなく、その後にも理解されなかったように思える」とある。
- (72) 尾崎一雄『あの日この日』(上), p.65 (『全集』第13巻)
- (73) 『私の履歴書』文化人5, p.368
- (74) 同上, p.386
- (75) 同上, p.372
- (76) 尾崎一雄『あの日この日』(上), p.26 (『全集』第13巻)
- (77) 同上, p.164, 426
- (78) 『初版本の思ひ出』(『全集』第9巻, p.59)
- (79) 『私の履歴書』文化人5, p.359
- (80) 『志賀直哉先生のこと』(『全集』第9巻, p.177)
- (81) 『私の履歴書』文化人5, p.396
- (82) 尾崎一雄『あの日この日』(上), p.65 (『全集』第13巻),『世に出るまで』(『全集』第10巻, p.169)
- (83) 『私の履歴書』文化人5, p.355 (引用は, 中村明編『作家の文体』とのこと)
- (84) 中野好夫編『現代の作家』まえがき, 岩波新書, 1955